

情報技術の匠

第57回
セキュリティ・サービスの匠

理屈と不条理の間で

「ほとんどの企業のシステムがインターネットにつながるようになり、誰もが攻撃の被害者になり得る状況です。特に一般企業などの環境では、何が脅威なのか、どのように優先順位を考えて対処すればいいのか、といった戦略を立てるべき情報を十分に集めるのは難しい」

セキュリティ・アナリスト・チームのリーダーとして、ネットワーク・セキュリティの脅威と戦う梨和は、お客様の苦境を実感している。

最近では、サイバー攻撃関連の報道の増加によって、「お話の世界」「対岸の火事」ではなく、わが身に降り掛かる当たり前の現実として、お客様の真剣さも増してい

るが、だからといって一筋縄では解決しないのが日々刻々と変化するセキュリティの世界だ。また技術的な話だけでなく、攻撃の背景も複雑化、多様化している。

「犯罪者グループによるありふれた金儲けなのか、逆に義憤に駆られたデモ活動なのか、洗練されたスパイ活動なのか…。攻撃者の意図を想定して全体像を考えないと対処が難しい問題も多い。このような状況だからこそ、世界中の脅威動向の情報を集め、専門の技術を持っているわれわれが役に立てる場面が多くなっていると感じています」

梨和のチームの役割の1つに「発信」がある。

「年に2回、現在起こっている脅威についてまとめたレポートなどを発表しています。もちろんまとめて終わりではなく、そのレポートを受けて、これからやらなければいけないことの方がはるかに大きい」

30ページを超えるレポートを数人のチームで作成する労力は相当なものだが、得られる達成感も大きい。

「お客様に参照していただいたり、同業のエンジニアからフィードバックをもらえることも多くなってきました。おかげで、以前は手弁当で就業時間外にこっそり書いていたものが、最近は業務として認められる雰囲気ができ上がりました(笑)」

梨和の経歴は、少し変わっている。

「子どものころから読書好きでした。今でも近代文学から最近のSFやミステリーまで何でも読みます」

映画で話題になる前に、小学生にしてロード・オブ・ザ・リングを読み、ガンダム・シリーズも小説ですべて読んだという梨和。その中で、自分の人生の進路に影響を与えた本を挙げるとしたら…。

「ウィリアム・ギブソンの『ニューロマンサー』とゲーテの『ファウスト』でしょうか」

「ニューロマンサー」は、SF小説分野のみならず、映画「マトリックス」の制作チームや日本の漫画



梨和 久雄 (なしわ ひさお)

日本アイ・ビー・エム株式会社
セキュリティ・オペレーション・センター
チーフ・セキュリティ・アナリスト

【プロフィール】

出版社勤務を経て、2005年、インターネットセキュリティシステムズ株式会社入社。マネージド・セキュリティ・サービス部門の導入チームに所属。2007年、日本アイ・ビー・エムに入社。現在、セキュリティ・アナリスト・チームのリーダーとして、広域インシデント対応、脅威動向の調査・内部トレーニング、お客様向けセミナー講師などの業務に従事。JPCERT/CCやIPAとの情報連携活動や、業界団体であるISOG-Jの技術WGや標的型攻撃対策検討WGにも参加している。

家、映像クリエイターたちに大きな衝撃と影響をもたらした作品。サイバネティクス技術と超巨大電脳ネットワークが支配する近未来の仮想空間で活劇が繰り広げられる。

一方『ファウスト』は広く知られた古典で、ファウスト博士と悪魔の契約というドラマを通して人間の本质を描く壮大な作品だ。

「ファウストを読んだのは高校生。高尚で難しい話が続く中、ラスト近くで、日々生活を営むために一生懸命働く人間の姿こそが最も美しいというようなことが描かれているんです。高校生、いわばモラトリアムの中にいた僕にとって、一生懸命に働いていたり、何かに取り組んでいる方へのあこがれや共感が芽生えた1冊でした」

両極端な2冊にも思えるが、理系だが文学好きであり、大学で選んだゼミのテーマも「現代思想」と「ネットワーク・セキュリティ」という梨和にとっては違和感のない選択なのだろう。

大学卒業後、就職先として最初に選んだ会社は国文学系の出版社。そこで意外な展開が待っていた。

「とても小さな会社だったので、本業である編集業務だけではなく、IT分野も担当することになりました」

当時アナログ文化から時代の流れの中でデジタルへの可能性を探っていた出版業界。ネットワーク・セキュリティの脅威は梨和の出版社にも忍び寄り、梨和はその対策も担うことになったのだ。その業務を通して少しずつ梨和の気持ちは変わっていく。

「編集は主観的で時には不条理

な世界。読んで楽しむのは面白いけれど、仕事にするなら、思いとは関係なく理屈で何が正しいのかはっきりする仕事が気持ちいいと思う自分がありました」

人生を面白くするために。仕事はネットワーク・セキュリティ、読書はプライベートで楽しむ。それが選択だった。

「当時はあまり考えていなかったですけれど、今思えば大胆な転職でした（笑）」

現在の仕事は、ある意味では、当時描かれていたサイバーパンク小説の登場人物に似ているのかもしれない。

「職場も、昔見た戦隊モノの秘密基地のセットが現実になったみたいな世界（笑）。正義の味方じゃないですが、ネットワーク・セキュリティで社会のインフラにかかわっていく重大な仕事だという思いは強いですね。ただ…」

その中でふと思うことがある。頭をよぎるのはファウストのあの場面。

「自分のやっている仕事を突き詰めて考え過ぎると、暗い部屋でPCを眺めているこの仕事は、お米を作ったり、自動車を作ったり、あるいは子どもたちを楽しませたりするようなサービスを提供しているわけではない。ふと、自分の仕事の価値が見えづらくなることがあります。そうならないためには、仕事を楽しんでやらなければいけないんじゃないかと思うんです。そうすれば一生懸命になれる。どんなささいな仕事であっても、無理やりでなくても、日々の達成感であったり、過程を楽しむことを心掛けています」

ファウストで共感した、働くことのリアルな手触りと喜び。成果とはまた別の達成感が、日々の仕事を支える糧になる。

精神的な糧はほかにもある。ネットワーク・セキュリティの社内、社外でのコミュニティー活動だ。

「さまざまな会社のエンジニアが集まるワーキング・グループで、現在、この業界で起こっていることの情報交換からはいろいろと得るものがあります。脅威の動向を回線から見ている人、PCから見ている人など、いろいろな角度からの情報が結びつく。そうすると全体のトレンドがつかめていくんです。新たな発見もあるし、自分の知らなかった新しい技術との出会いも多い」

また、会社はそれぞれ違っても、世代的にはそれぞれの会社で同じような立場にいる、そういう仲間と会話できるのも楽しさの要因。

「もともと人と話しながら飲むのは好きなんです。一人で先に帰りたいタイプで、つつい最後まで（笑）」

梨和は、常に自分の2つの顔と楽しく付き合っているのかもしれない。例えば、出版社に入社し、作品作りを目指していた文系の自分と、セキュリティに対する脅威を解析し、理詰めで戦う理系の自分。例えば「秘密基地」の中での孤独な戦いという役割と、その成果を仲間たちと世の中に知らしめる活動という役割。

サイバー小説と古典の大作をどちらも愛する梨和にとって、それは自然なこと。理屈と不条理、孤高の時間と仲間との時間…。どれも大切な、自分の世界だ。